

さわやかに たからかに とこしえに

秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校 校長室だより第5号
2020年9月3日(木)発行 文責 信田 正之

蝉の人生

夏休みがあつという間に終わってしまいました。もともと、臨時休業の補充として出校日を増やしましたので、夏休みが短く感じたのは当然ですが……。この間、校長室だより第4号で紹介した歌の歌詞「焼けるような夏」と言うべき日が連続し、先日の新聞には「戦後最も暑い8月に」という記事が掲載されていました。夏休みが終わってもなお高温の日が続いており、コロナ対策と熱中症対策に私も少々バテ気味です。でも、私が記憶している限り、秋が訪れなかった年はありません。「暑さ寒さも彼岸まで」の諺を信じ、今の暑さを乗り越えたいと思います。

さて、夏と言えば暑さ以外にもいろいろなものが連想されますが、その一つにあげられるのが「蝉の鳴き声」です。秋田県で最も多く聞かれるのはアブラゼミの鳴き声で、ほかにも夕方になるとヒグラシ、山間部ではエゾゼミの声も聞かれます。蝉が鳴き始めるのは、梅雨が終わろうとする初夏のころ。蝉の種類やその年の気温等によって多少の違いはあるでしょうが、私の自宅周辺では7月1日にアブラゼミが一斉に鳴き始めます。それからおよそ2ヶ月のあいだ、蝉の鳴き声が途切れることはありません。多くの蝉が一斉に鳴きたてる声を表した俳句の夏の季語に「蝉時雨」という言葉があります。趣のある美しい響きの言葉ですが、何十匹という蝉が近くで鳴いていたら、ただうるさいとだけしか感じません。ところが、8月のお盆を過ぎたあたりから、あれだけ騒がしかった鳴き声が急に聞こえなくなる。正にこれこそ、「蝉時雨」が夏の季語として多くの歌人に重宝されてきたゆえんです。

ところで皆さんは、一匹の蝉が鳴いている期間を知っていますか。「2ヶ月じゃないの？」と思う人もいるかもしれませんが、それは「鳴き声が聞こえる期間」であって、一匹一匹はせいぜい2～3週間です。しかし、実は蝉の寿命は長く、アブラゼミは5～7年とされています。こんなに寿命が長い昆虫は、ほかにあまり例がありません。蝉の仲間は一生の大半を幼虫として土の中で過ごします。この期間が長いのです。やがて土から這い上がって成虫に羽化した途端、数週間で寿命が尽きてしまうのです。では、いったい何のために成虫になるのか。その目的は「子孫を残す」ことに外なりません。あの鳴き声は雄が雌を引き寄せるための信号であり、雄は生殖相手が見つかりと交尾し、受精した雌は木の幹に産卵し、その後、雌雄とも命を終えます。雄の中には鳴き声が小さくて生殖相手が見つからず、6年間を無駄にしてしまう場合もあるそうです。そんな話を聞くと、蝉の鳴き声が生命をかけた「魂の叫び」のように聞こえてきませんか。私にはそう思えてなりません。

最後に、皆さんの人生を蝉の一生に置き換えてみましょう。蝉の幼虫時代を7年とし、その後大人になったのち3週間だけ生きられる。このスケールを人間に当てはめてみると、大人になるまでの年数を20年と仮定すれば、それから生きられる期間はわずか2ヶ月です。そのあいだ、皆さんは何をしますか。もちろん、幸いなことに皆さんには成人してから何十年という命が与えられています。そのことをどう受け止めますか。ぜひ考えてみてください。ただし、これだけは忘れないように。人間も蝉も、人生は一度きりだということ。